

みんなの心の傷になる死にキャラなのに、
執着重めの皇太子が俺を死なせてくれない

ニル・エヴァイヘット▲

B.Lゲーム『薔薇の学園の特待生』の番外編だけに登場する護衛騎士に転生した青年。
セシルを庇つて死ぬ運命を変えるために、襲撃犯を探しはじめる。

登場人物紹介

セシル・プログレス▲
セシル帝國の皇太子で、『薔薇の学園の特待生』の攻略キャラクター。
護衛のニルとは幼いころから仲がよく、誰よりも大切な存在。

セシル・プログレス▲

アイネ・リヒトヤー▲

『薔薇の学園の特待生』の主人公で、
特待生として学園に入ってくる。
愛らしい青年。

ゼラフ・ヴィルベルヴァント▲

俺様キャラの公爵令息。
攻略キャラクターだが、
なぜかニルに興味を持つている。

リューゲ・ライデンシャフト▲

メンシス・ライデンシャフト▲
帝国騎士団の副団長。陰気で口を開けば嫌味ばかり。

メンシス副団長の息子。理由はわからないがニルを敵視している。

第一章 もうすぐ死ぬキャラに転生しました

宮殿にある天井のない稽古場には、雲一つない快晴の空が広がっていた。

「おいっ！ 大丈夫か！」

焦ったような友人の声を聞きながら、硬い地面に後頭部を強打する。その衝撃で、俺は前世を思い出した。

カラソコロンと木剣が音を鳴らして地面を転がっていくのを横目に、急激に流れ込んできた記憶に困惑しつつ空を仰ぐ。

（ここって、BLゲーム『薔薇の学園の特待生』の世界だ……）

俺はぶつけた頭を軽く押さえながら、冷静に分析をはじめていた。

『薔薇の学園の特待生』は、俺——ニル・エヴィヘットが前世でこよなく愛したゲームだ。だから、すぐにつながる人気BLゲームの世界だと気づいた。

身体を半分起こすと、少し長い黒髪が視界の端に映る。多分俺の瞳は、この快晴の空のように澄んだ色をしているのだろう。

前世の記憶と今世の記憶が入り混じる感覚はまったく心地よいものではないが、とりあえず、転

生したことだけは理解した。だが、この身体に転生したのは大問題だ。

「大丈夫か。ニル」

「うん……でも、今のはかなり効いたかも。さすがは、セシル・プログレス皇太子殿下だ」「どうした、やけに堅苦しいな。二人きりのときは『セシル』でいいと言っているだろう」

彼が「立てるか」と言つて差し出した手を取り、起き上がつた。

俺に手を差し伸べたのは、銀色の輝く髪を持つた美青年——セシル・プログレスだ。

『薔薇の学園の特待生』の攻略キャラにして、俺の幼馴染で親友。さらには、ここ、サテリート帝

国の皇太子で、俺の護衛対象。瞳は、夜の星空を閉じ込めたような色をしている。

（憎らしいほどにゲームそのままの世界だな……）

『薔薇の学園の特待生』は前世で女性に大人気のBLゲームだつた。エロゲーにしては世界観の作り込みが細かく、いきなり濡れ場に入ることなくストーリーを楽しむことができる。そういう点が多くのユーザーに評価された。

物語は、不思議な魔力を持つ主人公が、モントフォーゼン学園に特待生として入学するところからはじまる。いわゆる学園もののBLゲームだ。

前世の俺は失恋したタイミングでこのゲームを妹に勧められ、まんまとハマってしまった。課金もして、どのルートも攻略済みのガチ勢。その中でも、セシルルートは何度もやり直したため、セリフはだいたい覚えている。

俺が転生したこのニル・エヴィヘットは、攻略キャラであるセシルの親友キャラだつた。しかし、

ニル自身は攻略対象ではなく、課金必須の番外編に登場するだけのサブキャラ。セシルの親友といいつつも、本編には名前しか出てこないキャラで、満を持して番外編でようやくそのビジュアルが解禁された。

（てか、今、いつだっけ？）

日差しは温かく、稽古場の敷地には春の花が咲いていた。

「ごめん、セシル。俺たちって何年生だっけ？」

「なんだ、その質問は。やはり頭を強く打つておかしくなつたか？」

「ひどくない？ それくらい答えてくれたつていいでしょ」

「二年生……いや、この春休みが終わつたら三年生だな」

セシルはため息をつきながらそう言うと、こちらを見た。俺が急に変なことを言い出したから、呆れているのだろう。

俺はそんなセシルとは対照的に、心が氷のように冷たくなつていた。

「あー……うん、そうだつた。三年生になる前の最後の春休みね。ありがとう、セシル」

「別に構わない。誰だつてふと忘れることがある……本当に悪かつたな。少し、熱くなりすぎた」

「そんなに謝らなくていいよ。受け身をしつかり取れなかつた俺のせいでもあるからさ」

セシルを納得させるために笑顔を作つてみたが、彼の表情は浮かなかつた。

「セシル、不細工な顔してるよ」

「不細工とはひどいな。心配しているんだ」

「はいはい。心配性」

俺は軽口を叩いてセシルをあしらう。それから、その場に転がっている木剣を拾つて、彼に渡した。俺は今しがた前世を思い出したばかりだが、昨日もその前の日もセシルと一緒にいた記憶も持つている。だから、身体に染みついた動作や癖、言葉はすんなりと出てきた。

「……はあ。お前が心配だから今日はこれくらいにしよう」

セシルは木剣を受け取つて、また心配そうに俺を見た。

ゲームの本編の彼は常に一人で、どこか寂しそうな雰囲気をまとつていた。でも、目の前の彼は違う。

セシルは人嫌いで、常に警戒心マックスのキャラとして描かれている。おまけに不眠症も患つており、當時機嫌が悪いという一番好感度を上げにくいキャラなのだ。

そして、不眠の原因是、彼との添い寝イベントによつて明かされた。

イベントの最中、セシルは何度も悪夢に魘^{うな}される。

そう、その悪夢の原因こそニルにあるのだ。

ニル・エヴィヘットという男は、三年生になる直前の春休みに、セシルを狙う刺客によつて命を落とす運命にある。この内容は、最近追加された課金必須の番外編『セシル・プログレスと春の彼』で明かされた。主君を守る騎士として最高の姿が、スチルになつていた。

しかし、セシルは自分の不注意のせいで、乳兄弟でもあつたニルが死んでしまつたと自分を責め続けることになる。

「セシル、あとさ……頭を打つたせいで今日が何日か忘れてしまつたんだけど」

さすがにわざとらしかつただろうか。ちらりとセシルを見ると、本当に大丈夫か? と言つて俺に顔を近づけてくる。攻略キャラで顔がいいんだから、もう少し自覚してほしい……とは言えない。

俺は、目を逸らすことで、なんとか彼の美の暴力から逃れることができた。

「三月五日だ。春休みは残すところあと一か月ほどだな。本当に、医者に診てもらわなくて大丈夫なのかな?」

「うん。大丈夫、大丈夫。セシルは心配しすぎなんだって」

セシルの気遣いは嬉しかつた。

彼を心配させないように笑顔で取り繕いながら、番外編のストーリーを思い出す。

（俺が死ぬまで、あと三週間前後か……）

前世を思い出した直後に、余命宣告をされた気分だ。

だが、その余命宣告は俺の行動次第でどうにか覆すことができるかもしれない。

なんとしてでも自分の死は回避したい。しかし現状、セシルを庇^はつて死んだということしかわからない。

背後を取られたセシルを守るためにニルが——という流れだから、襲撃のときに俺が違う行動に出た場合、セシルが死んでしまう可能性がある。

自分の死を回避するために、セシルを危険にさらしたくない。

課金しないと遊べない仕様だからか無駄にスチルが多かつたが、肝心な刺客の情報はあまり描か

れていなかつた氣がする。皇太子を狙う輩は多いだろうし、その理由もさまざまだ。

俺が最優先にするべきことは、刺客の情報を手に入れること。

そう考えつつ、セシルを見る。彼は、あどけない表情で首を傾げていた。

「何かあつたか？」

「ううん、なんでもないよ。ありがと。そつか、春休みって短いね」

「まだ、一か月あるだろ？ なんだ、ニル。お前は学園が好きじやなかつたのか？」

俺は苦笑した。セシルに怪訝そうな顔を向けられたが、今は笑つて乗り切るしかない。

（はあ）、セシルはどんな顔をしてもかっこいいなあ）

きりりとした眉に長いまつ毛の端正な顔。さすが攻略キャラであり、皇族といった感じだ。

俺——ニルも番外編でその姿が明らかになつたが、なかなかにイケメンだつた。でも、攻略キャラの顔のよさには勝てない。それにどちらかと言えばニルは童顔だつた。

俺はそんなことを思い出しながら、額に腕をこすりつけて汗をぬぐう。

「汗でべとべと。俺はシャワーを浴びてくるけどセシルはどうする？」

「シャワーでいいのか？ どうせなら俺の部屋のバスルームを使わないか」

「えつ、俺はいいよ。従者の俺がそんなところに行くなんて」

「俺がいいと言つてているんだ。拒否する理由はないだろう」

「いや、なんで……」

「それは……そもそも、お前は俺の護衛だろう！ いついかなるときもそばにいてくれないと困る」

そう言つたセシルの目は泳いでいるように見えた。他に理由がありそうだつたが、俺は詮索せず

に「あつそう？」と返す。

「でも、バスルームに剣は持つていけないよ」

「そうだな、だが……お前はその身一つで俺を守れるほど強いはずだ。職務放棄する気か」

「別に職務放棄しようなんて考えてないから。てか、お風呂に一緒に入るのが仕事になるわけ？ あと、都合のいいときだけ俺を護衛扱いしないでよ。さつきは、『皇太子殿下』つて言つただけで怒つたくせに」

俺の反論にぐうの音も出ないセシルは、「だが」と言葉を紡いだ。

「それはそれだ」

「それはそれ、つて。そんな子どもみたいな」

「……別に、昔は一緒に入つていただろう」

「ぼそりと呟いたあと、「じやあこれは命令だ。一緒に風呂に入れ」と言つて俺を指さした。こうなつたらセシルは何を言つても折れないで、俺はしぶしぶ両手を上げる。

命令となれば、拒否権はない。

俺はセシルと一緒に育つてきた。だから、確かに一緒に風呂も入つていたし、裸なんて何度も見ている。

俺たちは乳兄弟であり、主人と従者であり、そして親友だ。

俺のことを必要としてくれるセシルを見ていると、嫌な気持ちには一切ならなかつた。少し強引

だが、それがセシルという男だ。

「わかった。セシルの言う通りにするよ。じゃあ、またバスルームで」

「ああ。あまり無理して走るなよ。身体に響くぞ」

「わかつてゐるよ。心配性」

「……ニル、わかつてないだろ」

そんな文句を言い合つてから、稽古場をあとにした。

「はあ……」

広い廊下に出て、誰もいないことを確認し、息を吐く。

前世の記憶を取り戻したことはセシルにバレなかつたが、尋常じやないほど心臓が早鐘を打つていて、頬の筋肉は力チコチに固まつてゐる気がする。

（さてと、どうしようかな）

三週間前後で訪れるセシル暗殺未遂事件。

刺客が何人いるかも、その主犯格もわからない以上、イベントを回避することは絶望的だ。

今、俺が持つてゐる手札はゲームの知識だけ。俺が死を回避するために下手な行動を取ると、セシルが死ぬ可能性だつてある。ストーリーを改変しようと動くのはかえつてリスクだ。

「は、はは……震えてる」

普通に生きて、普通に寿命を迎えて死ぬものだと思つてゐた。死を間近に感じたことはなかつた。だから、目の前に死が迫つてゐると知つて足がすくみ、身体が震えている。

（死にたくないな……）

だが、まだどうなるかわからない。立ち止まつてはいられない。

自身の死の回避を目標に、俺はこの春休みを越えてみせる。

（セシルに、本編と同じように苦しんでほしくない）

脳裏には、番外編でセシルが見せた絶望の顔が浮かんでいた。

俺が死んだらセシルは悲しむ。親友として、護衛として、それだけは防がなくてはいけない。

（よし）

とにかく、情報を集めることからはじめよう。何せ俺の父は帝国騎士団の騎士団長なのだから。使える手札は切らなければ損だ。

俺は気持ちを切り替え、一步踏み出したのだった。

◆◆◆

「ふう、やはり鍛錬のあとは風呂に限るな」

「こんなに広いのに、男一人つてさ。なんか笑えるね」

大理石造りのバスルームの浴槽は、前世の学校のプールくらい広く、二人で入るにはもつたいない大きさだ。

俺たち男一人に似つかわしくない青い薔薇の花弁が浮かんでいて、雰囲気が少し色っぽい。この

美しい薔薇は、宮殿の庭園に咲いているものだろう。

（なんか贅沢だよな……）

何度も入つたことのあるバスルームだが、改めて広く感じる。

俺はあまりの広さに落ち着かず、青薔薇の花弁をつまんだり、集めたりしてみる。

隣でセシルがふう……と息を吐き、髪をかきあげる様子が目に飛び込んできた。

セシルの銀色の髪はすでに濡れて水滴が滴つており、色気が増している。血色のよい肌に、俺よりもしつかりついた筋肉。特に発達した胸筋や、肩から腕にかけての筋肉は目を見張るものがあつた。

同じように剣を握り、鍛錬を積んできたはずなのに、どうしてここまで差がついてしまつたのだろうか。俺は自身の胸に手を当て、セシルの胸筋と見比べた。すると、彼の夜色の瞳と目が合つてしまつた。

「な、なんだ、先ほどからじろじろ見て。恥ずかしいだろ」

「見てないし。てか、セシルに恥ずかしいっていう感情があるのが驚きかも」

「見ていただろう！ なんだ、ニルは俺の身体に興味があるのか？」

「ない……いや、ないこともないんだけど。ああ、もうなんで近寄つてくるの！」

「もつと近くで見たいのかと思つてな」

「もつと近くで見たいのかと思つてな」

「そんなことは言つていない」

セシルは、俺の制止を振り切つて自信満々に近づいてくる。だが、俺の目の前まで来るとパツと顔を逸らしてしまつた。

「お前に見つめられると困る」

「なんでも？」

「それは、ニルが……いや、なんでもない」
セシルはそこで話を切り、ブクブクとお湯に半分顔を沈めた。
「お前に見つめられると困る」
「なんでも？」
「……セシル、思つたんだけどさ。俺たち何度も一緒に風呂に入つたことあるから、別に見てもいいでしょ」
「お前に見つめられると困る」
「なんでも？」

セシルはそこで話を切り、ブクブクとお湯に半分顔を沈めた。
俺の身体は筋肉がつきにくいタイプだが、ないわけじゃない。いわば細マッチョの部類だ。でも、だからこそセシルの肉体美に惚れ惚れしてしまふし、うらやましく思う。
修学旅行のお風呂タイムではしゃぐ学生みたいな会話をしながら、もう一度セシルを見た。
(セシル・プログレス皇太子……攻略難易度、バカ高皇子)

ゲームの知識から考へると、セシルは人を寄せ付けない冷徹皇子だ。とにかくパーソナルスペースが広く、親しい人間でもある一定の距離までしか近づけない。ただ一人、そのパーソナルスペースに入れる人間がいるとすれば、俺——ニル・エヴィヘットだけだった。

セシルは、眉目秀麗、文武両道、剣の腕も魔法の才もあつて、非の打ち所のないイケメンだ。特

にビジュアルは、イケメン揃いの攻略対象の中でも群を抜いている。

そのかつこよさから、ゲームをはじめたばかりのユーザーが最初に攻略しようとして、難易度が高くて失敗するキャラでもあった。俺も最初の攻略で見事失敗した。

そもそも俺がこのゲームにはまつた理由は、ストーリーや攻略対象のビジュアルのよさもあつたが、失恋した相手とセシルの声が似ていたからだ。

（思い出しただけで辛いな……もう、未練はないけどさ）

前世の俺は、ずっと一緒に育ってきた親友の男に恋をしていた。

自分の恋心に気づいた高校生のときに、彼が異性愛者であると知つてしまつたのだ。俺は親友の恋愛相談に乗つて、彼は晴れて好きな女子と結ばれた。俺は上^う面だけの祝福をして陰で泣いた。卒業式に告つて成功するという稀に見ない成功パターンだつた。

失恋して一か月ほど経つたある日、大学生になる直前に妹にこのゲームを勧められた。最初は嫌がらせかと思ったが、セシルの声に惚れてはじめるとすぐに沼つてしまつたのだ。ビジュアルも俺の性癖に刺さつた。

それからの俺は、画面の向こうのセシルに親友を重ねた。その後、ニルという親友が出てきて、彼らの仲のよさに古傷を抉られたわけだが。

セシルがニルに恋愛感情を抱いていたかは定かではないが、とにかく大きな感情を向けていたことは確かだつた。そりや、長年一緒に生きてきた親友が自分を庇^{かば}つて死んだら傷つく。

ニルはそんな特殊な設定のキャラだつたからこそ、人気が高かつた。ゆえに、番外編を読んだほとんどのユーザーの心に傷を残したのだ。

でも、実際に番外編を読まなければ、ニルはセシルが主人公に新たな愛を向けるためのお膳立てキャラにしか見えない。心のどこかで主人公にニルを重ねていたセシルが、ニルへの執着を捨て、主人公という人間を愛するようになる……

決してニルのことを忘れるわけではないが、セシルは過去の思い出に縋るのをやめ、未来に向かつて歩くことを決意するのだ。

そんな死にキャラであるニルのストーリーは泣けて好きだつた。でも、やつぱり一番はセシルだ。
(今やそんな推しで、ガチ恋に足を突つ込んじやつたセシルが目の前にいるんだよな)
しかも裸で、たくましい筋肉を俺に向けて。

スチルで何度も見た裸が目の前にある。

これまで気にならなかつた。なのに、こんなにも魅力的に見えるのは前世の記憶のせいだらう。いや、もしかしたら、ニルもセシルのことをそういう目で見ていたのかもしれない。

真相はわからぬが、少なくとも俺はセシルに好意を抱いている。もちろん親友として、推して、人間的に好きという意味だが。

「本当に、怪我していないんだな？」

「だからー！ 大丈夫だつて言つてるじゃん。過保護すぎ」

「盛大に後頭部を強打してよく言う。ニルは石頭なのか？」

自分のことは見るなど言つたくせに、セシルは俺をじつと見つめてきた。そしてさらに、鼻と鼻

がくつつくんじやないかと思うくらい距離を縮めてくる。俺は咄嗟に避けようとしたが、それよりも早くゲットと腕を掴まれてしまう。

稽古場でのあの事故は、鍔^{つば}迫り合いになつた際に起つたことだ。

セシルの攻撃が当たつたわけではなく、俺が不注意で倒れただけ。セシルに非はまったくないのに、彼は俺のことを心配そうに見つめている。

「ちょっと、セシル」

セシルは俺の顔の輪郭をなぞつた。指先が耳を掠めて、俺は思わず身じろぎしてしまう。

「やつ……」

「……つ、悪い！」

「い、いきなり触るの禁止!! 触れられるとくすぐつたいし、恥ずかしいから」

俺はなんとかそれらしい理由をつけてセシルの手を払つた。

触れられたところが沸騰してしまいそうだ。推しが触れたという興奮と、単純なくすぐつたさで心臓がバクバクと音を鳴らす。俺はセシルが触れたほうの耳を触つた。

彼は一瞬ドキッとしたような顔をしたあと、フッと意地悪く笑つた。

「二ルの弱点か。覚えておこう」

「いや、覚えないでよ……セシル、性格悪いよ？」

冗談なのか本気なのかはわからない。

俺が耳を守るように手を当てながら距離を取ると、セシルは少し傷ついたような顔をした。

俺はそんなセシルをかわいく思いながら、先ほどの手合わせを振り返る。

「今日の勝負は俺の負けでいいよ。倒れたのは俺の不注意だつたわけだし。敗因は相手に隙を見せたこと。これまで手合わせしてきたけど、今日のをカウントしたらセシルのほうが二回多く勝つたつてことになるね」

「棄権ということにもできるだろう」

「棄権は負けと一緒でしょ」

「そう、なのか？ だが、お前らしいな。しつかりと分析し、負けを認めるその潔さはさすがだ。

お前がそれでいいなら、俺は三百二勝、お前は三百勝になるな」

まんざらでもない顔だった。

今のところ俺はセシルに負け越しているが、引き分けも多い。

俺は帝国騎士団の騎士団長である父の才能を引き継いでいるが、セシルは違う。彼は、持ち前のストイックさと努力によって剣の腕を磨いた。才能に恵まれている俺と剣を交えても、セシルは毎回五分五分……いや、押し気味に持ち込む。

なんといっても、セシルの強みは圧倒的な腕力にある。一撃一撃が重く、真正面から受け止めるのは至難の業だ。そのうえ、セシルは負けず嫌いなどころがあり、負けたら勝つまでやると言つて聞かない。

この勝負は、幼いころからずつと続いている。俺たちは常に切磋琢磨しあつて生きてきた。きっとこれからも、それは変わらないだろう。

「今度は勝つよ。負けっぱなしじゃいられないからね」

「ああ、いつでもかかってこい。それに、休みが過ぎればまた学園に戻ることになる。今年の大会も優勝を目指すからな」

「セシルに勝てる人が他にいるかな？」

春休みが明けたら、俺とセシルは三年生になる。俺たちが在籍している騎士科以外にも、モントフォーゼン学園には魔法科や商業科といったさまざまな学科があり、国中から優秀な生徒が集まっている。

セシルの言う大会というのは、五月に開催される学科別実技大会のことだ。通称『剣魔大会』。この大会でセシルは、去年も一昨年も騎士科一位という成績を収めている。

（まあ、そこまで俺が生きているかわからないけど……）

濡れた前髪を払いながら、思わずため息が漏れた。そんな俺を見逃さなかつたセシルは、夜を閉じ込めた瞳でじつと見つめてくる。

「な、何？」

「ニルがため息なんて珍しいと思つてな」

「いや、ため息をつくことくらいあるでしょ。それとも、ついちゃダメ？」

「……悩みがあればなんでも相談してほしい。将来のことでも、なんでもいい。お前の話が聞きたい」

セシルは力強くそう言って俺の手を握る。俺は笑みがこぼれた。

「そうだね。ありがとう。心強いよ、セシル。何かあつたら相談させてもらうよ」

「そうか。先ほどは少し変だと思つたが、いつも通りのニルだな。お前のことはよく知つてゐるはずなのに別人に見えた」

「え……いやあ、頭を打つてちょっとおかしくなつてたかも」

「図星を突かれた。けれど、前世の記憶を取り戻したなんて言えるわけない。

俺は慌てて首を振つて否定したが、セシルは「やっぱり、頭を打つたのが原因か？」と氣にしている。過保護すぎるというか、大げさすぎるというか。ちょっと抜けていて、俺のことになると冷靜さに欠けるのが彼の最大の弱点なのかもしれない。

大丈夫だと言つて、セシルの手を握り返す。俺と同じように剣だこのある硬い手のひら。俺よりも少し大きくて長い指に俺の指を絡ませると、セシルの指先がピクリと動いた。

「ニル？」

「何度も言うけど、セシル。俺のこと心配してくれてありがと」

「…………当たり前だろう。親友なのだから」

「あははっ、そうだね。でも、そうやつて直接言つてくれるのが嬉しいよ。セシルのそういうところ、好きだな」

俺がそう言うと、セシルは一瞬だけたじろいだものの、咳払いをして「ああ」と嬉しそうに返事をした。

そんなセシルの表情は、俺にしか見せない優しい笑顔だつた。



次の日もよく晴れた。

前世の記憶を取り戻して「田が経ちた。春休みの間にセシルと俺に訪れる事件について考えずにはいられなくて、不安が胸の中で渦巻いていた。

官廁の廐なめらかまきをめぐらす。一寸のひらきなく、一寸のひらきなく、金鎖かなくわをくわせば、その流れれんれいが、てきなものとなる。一分一秒も気が抜けない。鍛錬を積んで己を磨くことが、セシルの護衛騎士としてできることだ。

「おはよう、セシル。いつも早いね」
「私は俺に気合に負けたからだ」

声をかいると セシルは手を止め 片手で汗を拭いながら俺を見た
セシルの朝は早い。俺がセシルより早く起きたことなんて数える程だ

いるのだろうかと心配になるほどだ。

「寝坊か？ いつもより十分程度遅かつたじやないか」

「そうだね、寝坊しちやつた。セシルより早く起きようと努力はしてるんだけど」

「ニルは朝が弱いからな。寝癖も治っていない」
「これは癖毛だから、寝癖じゃないって。ちょっと遅刻しただけでそこまで言わないでよ」
「ははっ、ついつい揶揄からかいたくなるんだ」
はねた髪を押さえて抗議すると、セシルはなぜか嬉しそうに笑っていた。人が気にしていることを言つてくるなんてひどい男だ。

いつもなら寝ぼけたり直し、もう少し早めに稽古場に向かうのだが、理由はただ一つ、これからのことを考えていたから。

番外編のストーリーは、主にニールとセシルの友情を描いていた。だから、襲撃シーンのスチルはあつたものの、刺客がどんな目的でセシルを狙つたのかは明らかになつていない。それだけではなく、いつどこで刺客に襲われるのかもストーリーで描かれていないのだ。

わかるている情報といえは、襲撃の時間が夜だることくらい

族に反感を抱いている貴族や組織を、数週間の間に絞り切るのは難しい。
第一皇子の護衛である俺が頼んだとしても、騎士団が動いてくれるとは限らない。頼れる相手がいるとすれば騎士団長である父だ。父は忙しい人だから、証拠がない状況では協力してくれないだろうが、相談しようとは思っている。

「そういう日もあるの。明日からは寝坊しないから……さ、練習しよう。一分一秒でも無駄にでき
まずは自分にできることからはじめよう。それが、身体能力を高めることだつた。

ないからね」

「ああ、よろしく頼む」

俺たちは互いに距離を取り、剣を構える。そして、どちらからともなく地面を蹴り上げた。

雑念を捨て、ただひたすらに剣を振る。金属同士がぶつかる音を聞くと、身体の熱が上がる。キン、カキンッとせめぎ合い、火花を散らす。近づいたと思つたらすぐに距離を取り、相手の出方を窺つて、また飛び出す。その繰り返しだ。

「はあっ！」

一段と強く踏み込んで距離を詰めたが、渾身の一撃は防がれ、隙をついてセシルが攻撃を仕掛けてくる。俺はなんとか受け止めた。

そうして互角の勝負を続け、今日は引き分けになった。

いつたん休憩を取ろうかと目配せする。二人とも呼吸は荒く、滴る汗を服で拭つた。

「セシル、日陰で休む……って、うわつ……ご、ごめん。セシル」

移動しようと数歩歩いたところで足がもつれ、倒れそうになつたところをセシルが支えてくれた。少し身長差があるので、彼の腕の中に閉じ込められてしまう。厚い胸板がすぐ近くにあった。

俺は慌てて体勢を立て直そうとした。だが、今度はセシルがバランスを崩し、こちら側に倒れてくる。咄嗟にセシルの身体を支えると、セシルが俺に抱き着く形になつてしまつた。

「す、すまない」

「ううん、大丈夫。お互い様でしょ。それよりも、顔赤いよ？ 大丈夫？」

「そつ、それは、お前もだろ」

紅潮した顔に、絶えず流れ落ちる汗。抱き合つて見つめ合つていると、変な気持ちになつてくる。セシルは否定したものの、かなり頬が赤く染まつていた。

その後、俺たちは休憩を長めに取ろうということで意見が合致した。ベンチのほうに移動しようと思つて身体を離すと、大きな人影が稽古場を通りかかるのが見えた。

「お久しぶりです。皇太子殿下」

「騎士団長殿か。そんなに久しいだろうか」

「はい。最近は立て込んでおりましたので……それと、励んでいるか。ニル」「は、はいっ。父上!!」

日陰から出てきたのは父だつた。俺より三十センチほど背が高くて大柄で、ツンツンとした灰色の刈り上げヘアが特徴的だ。重そうな大剣を背負つており、俺とはまるで似ていない。帝国の騎士服に身を包んではいるものの、胸元のボタンは上から二つ開いていてワイルドだ。

俺は最低限の身なりを整え、慌てて父に敬礼をした。

父は帝国騎士団をまとめる騎士団長であり、エヴィヘット公爵家の当主でもある。俺は父を尊敬しているし、目標についていた。父は帝国最強の剣士であり、この国で一番腕が立つと言われている。俺とセシルが束になつても一度として攻撃が通つたことがない、負けなしの最強騎士だ。

しかし、父はゲームでは名前だけしか登場しない。息子のニルが死んだことによつて、心を病み、奇襲に気づかず殺された……と番外編で語られていた。

(もし俺が死んだら……)

セシルだけではなく、太陽のように明るい父も悲しませてしまうことになる。俺はこの春休みを生き延びねばと改めて決心し、拳を握った。

父は厳しいが、とても子煩惱な人だ。俺に剣を教え、騎士としての在り方を教えてくれた。俺のことを誰よりも応援してくれている。だから、父の期待に応えたいし、悲しませたくない。

「父上は、どうしてここに？」

「ちょうど偶然近くを通りかかったところでな。聞き慣れた声がしたから立ち寄つてみたのだ。フツ、ニル……まだまだだな」

「はい。目標である父上にはまだまだ届きそうにないです」

「俺を目標にしているのか。カツカ！ それは楽しみだな。ならば、一つアドバイスをやろう」

父はまだまだと言いつつも、いつもしつかりとアドバイスをくれる。俺はそれが嬉しくて、少し前めりになつて父の話を聞く。

父は身振り手振りを交えて説明をはじめた。

「いつも言つているだろ？ 敵の動きだけを見るのではなく、周囲の環境にも同時に気を配ることが重要だ。利用できるものはなんでも利用しろ。それと、つい先日剣を新調したと聞いていたが、使い勝手はどうだ？」

「はい。それが、俺の技量の問題かもしませんけど、思つたように動かせなくて」

「そうか。じゃあそれは技量の問題じやないな。ニル、お前は素早いから、人よりも多く手数を出

すことができるだろ？ だが、それが生かせていないことは、剣が重いんじゃないかな？ 剣が重くて長所を生かせていないのなら、軽くて細いものにしたらどうだ。そのほうが、お前の身体に合うだろ？」

「なるほど、勉強になります。父上」

確かに俺の体格からすると、細身の剣のほうが合つているだろう。剣を変えたら、素早さを生かした攻撃ができるかもしれない。

環境の話に関しては、昨日、セシルとの手合わせ中に転んだことを指摘されたようで、頬が引きつった。

「恐れながら皇太子殿下も、力任せの攻撃は身体を痛める原因になります。相手の力を正面から受け止めるのではなく、流すようにすればよろしいかと思います」

「そうか、団長殿、勉強になる。団長殿の言うように、長く剣を振るうためには必要な技術だな」

父はにこりと笑つた。

偶然通りかかったと言つていたが、少し前から俺たちを見ていていたのかもしれない。そうでなければ、ここまで的確なアドバイスはできないだろう。その気配に気づけなかつたのは、セシルの護衛としてあるまじき失態。これから気をつけよう、とよりいつそう気を張る。

笑顔を絶やさず、どんな逆境にも耐える父のようになりたい。

「父上、少しお聞きしたいことが……」

刺客のことを聞こうと思つて父に話しかけたとき、後ろに控えていた男が咳払いをした。明らかにわざとらしい咳払いで、俺は眉を顰める。

「団長殿、そろそろ時間です。職務を怠つてはいるど、他の騎士たちから苦情が来ます」

「もうそんな時間か。ニル、何か用だつたか？」

「あ、いえ……大丈夫です。また時間があるときにでも」

父は近くにあつた時計をちらりと見る。

「そうか。じゃあ、仕事に戻ることにしよう。皇太子殿下、私はこれで失礼いたします。うちの息子をよろしくお願ひします」

「ああ、心得た」

「ちよ、ちよつと、セシル……父上も、なんでそんなこと言うんですか！」

俺がセシルを守る側だから、「皇太子殿下をしつかりとお守りするんだぞ」と言うのが普通ではないか。

父にそう文句を言おうと思つたが、すでに稽古場から去つたあとだつた。

（うーん。でも、忙しい人だからしようがないよな）

本当は、皇族に反感を抱いている人間の情報や、敵が複数人現れたときの対処法などを聞きたかつたが、父は忙しい人だ。無理に引き止めることはできない。また今度時間があるときに話を聞くことにして、まずは自分で対策を練ることにする。

（……それにしても、あの人は誰だつけ？）

父に声をかけた男は誰だつただろうかと記憶を手繕り寄せた。ワインレッドの長髪の男は、父と同じ騎士服に身を包んでいた。敬語を使つてはいたものの、父と対等に話しているように見えたので、それなりの役職の人物であることは確かだ。

考えごとをしていると、セシルが俺の隣にやつてきて稽古場の入り口を見据えた。

「団長殿は相変わらずだな」

「うん。でも、やっぱりすごい人だよ。俺も、もつと頑張らないと。ところでさ、後ろにいた人つて誰だつたつけ？」

「二ル、忘れたのか？ 彼は、一年ほど前に副団長に就任したメンシス・ライデンシャフト侯爵だ。団長殿をライバル視していて、副団長就任前は社交の場でだいぶ嫌がらせをしていた。知らないのか？」

まつたく記憶になかつた。セシルの耳にも入つてはいるということは、それほど陰湿な嫌がらせだつたのだろう。

だが、父からそういう話は聞いていない。先ほども、普通に騎士団の同僚として接しているようを見えた。父が仕事に私情を持ち込まない性格であることは有名だが、メンシス副団長も同じなのだろうか。

俺たちは休憩を終わらせることにして、立ち上がる。

「さ、もう一度やろう。今度は俺から行くよ」

「ああ、いつでも来い」

そんな会話をして、再び剣を交えた。

父上に言われた通り、周囲をよく観察する。稽古場の地面は固いが、気を抜くと荒い砂に足を取られて滑つてしまいそうになる。俺は地面を蹴る力加減を調節しようと考へ、実践してみることにした。すると、先ほどよりも身体が軽く感じる。

（確かに、これなら小回りが利きそう）

変わった俺を見せてやると意気込んだが、同時にセシルの動きも変わって隙がなくなった。互いに、父のアドバイスを実行しているからだ。

（こうやって鍛錬を積んでいけば、襲撃に対応できるようになるかもしれない……）

焦る気持ちを抑える。そして、ただ強くなるためにもう一度剣を振るつた。

セシルを守り、自分の未来を変えるために。

額から流れた汗はまるで星のようだつた。



セシルと抜け出してきた宮殿が遠くに見える。昼間の青空には、綿菓子のような雲がぽつぽつと浮かんでいる。

城下町は、貴族や商人、平民など、さまざまな人が行き交っていた。

「勝手に抜け出して、怒られるよ。セシル」

「大丈夫だ。誰にも見つからないはずだ。それに、ニルも一緒に来ているから同罪だ」

平民らしい装いのセシルはニヤリと笑つて俺を見る。

父にアドバイスをもらってから二日が経つた。俺たちは今、城下町に来ている。

本来であれば、第一皇子であるセシルはむやみに外に出られないが、宮殿にある秘密の抜け道を使つた。

もちろん、無断外出はこれが初めてではない。

セシルの髪色は変装魔法によって茶色になつてゐるが、不思議な色の瞳までは変えられなかつたらしい。平民風の装いだが、明らかに高貴なオーラを放つてゐる。

俺も髪型を変えて眼鏡をかけ、セシルの後ろを歩く。

セシルが外出する際は、俺の他にも何人か護衛を連れて歩くのが決まりだ。無断で外に出たことがバレたら怒られるのは確実だつた。

「ニルは心配しすぎだ。それに、怒られたくらいでやめるつもりはない」

「いや、そうじゃなくて。刺客が現れたらどうするのさ」

「そんなことをいちいち気にしていたら息が詰まるだろう。襲つてきたら返り討ちにすればいいだけの話だ。それに、お前もいる」

「もー、皇太子なのに楽観的すぎるよ。そりや、君のことは守るけどさ」

正直に言うと、俺は二人で出かけることには不安しかなかつた。

いつも狙われるかわからないというのに、セシルは「大丈夫だ」と言つて、俺の手を引いて強引に

外へ連れ出した。

「皇太子……か」

俺が『皇太子』と言つたからか、セシルの眉間にしわが寄つた。彼はそう呼ばれるのを嫌つてゐる。セシルは自分が皇太子だという自覚を持ちつつも、一方で何にも縛られずに自由に生きたいと思つてゐる。彼は長い帝国の歴史の中で、きわめて異質な考え方を持つ人物だつた。

だが、セシルのおかげで、俺は彼の護衛という立場であるにもかかわらず、親友として彼の隣にいられる。

（はある……もう、危機感ないんだからさあ）

そう思うも、これ以上ダチダチ言つて彼の機嫌を損ねたいわけではない。俺が気をつければいいだけの話だ。

二日前、俺は仕事終わりの父を捕まえることに成功した。『護衛騎士としてセシルを守るために、今以上に頑張りたい』と言つて、皇族を狙う輩について聞いてみたが、候補が多くて絞り込めなかつた。

そんな状態で、セシルと外出を楽しめるわけがない。ゲームで見たスチルは夜だつたが、セシルの周りには常に危険が付きまとつ。一分一秒も気が抜けない。

セシルはそんな俺をよそに、能天気に隣を歩いてゐる。もしものことがあつてからでは遅いのに、何を言つても大丈夫だと軽く受け流されるのだ。セシルが強いことは十分理解しているが、不安なものは不安だ。

（人の気も知らないで……）

それでも、セシルを前に暗い顔をしてはいけないと想い、笑顔を取り繕う。俺は気を紛らわせるために、偶然目に入つた露店を指さした。

「セシル、あれ食べない？」

「露店か。確かに、おいしそうだな」

「でしょ？ もうお昼時だし」

俺はセシルを連れて露店が並ぶ通りまで歩いていく。そこではさまざまな露店が食べ物を売つており、食欲を誘う匂いがあちこちから漂つっていた。

俺が興味を持つ露店は、肉や野菜の串焼きを売つていた。俺は店主に声をかける。

「おじさん、これ二つください」

「あいよ！ 二つで銅貨十枚だ！」

「じゃあ、これで」

俺は懐からお金を出して、店主に渡す。すると、セシルが横から口を挟んできた。

「俺が出す」

「いや、いいつて。というか、セシルに出させるのつて」

「ここまで来て従者らしさを出すな！ 俺たちは親友だろ？」

「うつ……なんか、親友を魔法の言葉か何かと勘違いしてない？ まあ、セシルがそう言つたら、割り勘でもいいけど」

俺は出しかけたお金を見た。結局自分の分は自分で出すことになり、俺たちは一本ずつ串焼きを買った。

そして、露店から離れたベンチに座ることにした。

今俺たちがやつていることは、前世でたどえるなら学校をサボつて遊びに行くことに近い。許可を取らずに、無断で宮殿を抜け出してきた。背徳感を覚えながら食べる串焼きは格別だった。

長い串に刺さった肉と野菜を交互に食べて、感想を言い合う。味付けは塩コショウとガーリック。口の中に入るとじゅわあっと肉汁が溢れだし、少し甘めの玉ねぎはいい焼き加減でいくらでも食べられる。

半分食べ進めたところで、俺はふとセシルに話しかけた。

「前に宮殿を抜け出したのはいつだつけ？」

「帝国建国記念パーティーの日だな。夜会がおもしろくなくて抜け出して、外で花火を見た」

「そうだった。露店に行きたかったけど、その前に見つかって怒られたんだよね。懐かしいな」

俺はそのときのことを思い出していった。

サテリート帝国では毎年、帝国建国記念パーティーとパレードが行われる。

確かに十歳のころのことだった。もう大きくなつたからなんでもできる！ 魔法も使えるようになつた！ と、調子に乗つていた時期だったのを覚えている。

そんなまだまだ子どものときに、俺とセシルは一人で宮殿を抜け出した。つまらないパーティーよりも、冒険をしたかったのだ。

城下町が一望できる丘の上で花火を見た。赤や黄色、オレンジと夜空を彩る花火は、今でも目を閉じれば思い出せるほど鮮明に記憶に残つていて。でも、城下で流れていた陽気な音楽につられて歩いていたら、従者に見つかって宮殿に戻された。俺は父にこつびどく叱られ、セシルも皇帝陛下に怒られて一ヶ月ほど謹慎を言い渡された。

懲りない俺たちは、それからもたびたび許可なしに外に出ている。思い返すと懐かしくなるが、俺たちは今も変わつていない。

セシルは最後の肉を平らげて、「もう一本買つてもよかつたな」と言いながら俺を見た。俺の串には肉も野菜もまだ残つており、どうやらそれを狙つて見ているようだつた。野菜に目がいかないところを見ると、よっぽど肉がおいしかつたらしい。

「食べる？」

「いいのか？ だが、それは、その、間接キ……」

「ん？ 何？ ほら、セシルのほうがよく食べるし。俺はこれくらいでも十分だからさ。それに、セシルがおいしそうに食べるのを見てると、なんか嬉しくなつちゃうんだよね」

食べつぶりがいいから、見ているだけで気持ちがいい。

そう伝えると、セシルは「そうじゃない」と言つたが、すぐに顔を明るくした。それから、「じやあ」と俺の手を掴んで、串から肉を引き抜いた。程よく脂の乗つた肉がセシルの口の中に吸い込まれていく。ペろりと平らげ、口の周りについた脂を舌で拭う。

「やはりおいしいな。また次も買おう」

「食べることしか頭にないの？ セシルらしいけど。でも、おいしかったね」

俺は最後の一つを口の中に放り込み、近くにあったゴミ箱に串を捨てた。

そして、俺たちは再び城下町を歩く。いつ来てもここは賑やかだ。

セシルは目に映るものすべてが珍しいのか、「あれはどうだ」とか「これは興味深い」とときどき俺を見ながら話しかけてくる。それを聞き流していると、反応が薄いと言つて眉を寄せた。俺はそんなセシルを見ているだけで笑顔になれた。

しばらく歩いて、とあるハンドメイドアクセサリーを売つている露店の前で立ち止まつた。俺たちは小さくて美しいアクセサリーに視線を落とす。

「このブローチの宝石、ニルの瞳の色に似ているな」

「それを言うなら、このネットレスの宝石は、セシルの瞳の色みたいだよ」

並んでいた商品を互いにかざして笑い合う。こういつたアクセサリーは、かわいいご令嬢にプレゼントするものだと思う。

街を歩く人々に目を向けると、やはりBLゲームの世界だからか男性カップルがたくさんいた。腰を抱きながら歩いていたり、近い距離でしゃべっていたり、恋人らしい甘い空気が漂つている。なんだかうらやましい。

そんな人々から目を逸らすと、セシルと目が合つてしまつた。

「どうした？」

「え、いや。日中はカップルだらけだと思って」

「そう言わればそうだな」

セシルはそれまで「気にしていなかつた」というように、あたりを見渡す。そして「確かにそうだな」と改めて口にすると、周りにいるカップルたちをしばらく眺めていた。

「我が国は同性婚が可能だからな。それに、貴族同士であれば同性でも子どもを授かれないこともないからな」

「それって『祝福の花』のことだよね？」

俺が聞くと、少しだけセシルの顔が曇つた気がした。しかし、すぐに「そうだ」と言つて俺に目を向ける。

『祝福の花』というのは、魔力と愛情を注いで咲かせる花のことだ。

このBLゲームの世界では、同性同士が『祝福の花』を育てることにより、子どもを授かることができる。ただ、相当な量の魔力と愛情を注ぎ続ける必要があるため、魔力の多い貴族にしか花を咲かせることができない。

ゲームでは、この『祝福の花』を攻略キャラと育てて子どもを授かる——といった展開が用意されていた。

「不思議な話だよね。セシルは好きな人が同性だった場合、『祝福の花』を育てるの？」

「ああ。俺の場合は、皇族として世継ぎの問題があるからな。好きな人との結婚を認めてもらうためにそうするだろう。と言つても、子どもを自分と相手が結ばれるための道具にはしたくないが」セシルは少し語氣を強めてそう言つた。

(そうそう。セシルは入学してきた主人公のアタックによつて落ちる……はずだしね。それで、主人公と一緒に花を育てることになつて……)

しかし、実際はどうなのだろうか。

主人公がセシルルートを選ぶとは限らないし、ハーレムエンドに突入する可能性だつてあるわけだ。どうなるかは、この春からの一年の間に決まる。

セシルの幸せが俺の幸せだ。もしセシルが何か困るようなことがあれば、相談に乗つてあげたい。

(……本当に?)

まだ先の確定していない未来を想像して胸が痛む。親友の恋愛相談なんて、前世のこともあつてもうこりごりだ。

ただ、あのころとは違うことがある。今、俺はセシルに恋愛感情を抱いているわけではないのだ。前世の推しだから憧れを感じていたり、胸がときめいたりすることはあるが、恋心ではない。俺は、親友として彼を支えたいと思つていてる。これは本心だ。

「ニル、もう少し歩いてみよう。今度は武器屋に行つて、武器を新調しないか?」

「いいかも。父上に自分に合う武器を選べつて言われたし、ちょうど新しい武器が欲しいと思つていたところなんだよね。さつすが、セシル。俺のことをなんでもわかってるね」

「当然だろ。お前のことを見つけてきたんだ。これくらい当然だ」

セシルはそう言つて、誇らしげに口の端を上げて笑つた。

俺は先を歩くセシルの背中を追いかける。俺たちは目的地の武器屋に向かつて、しゃべりながら

歩き続けた。

少し歩くと、大通りに出た。そこには雑貨屋や武器屋が並んでおり、荷物をたくさん持つた人たちが行き交つていた。

俺たちは看板に剣と盾のマークが描いてある店に入つた。

カラソコロンと涼しげなベルの音が鳴り、金属と木の香りが混ざつた匂いが俺たちを包み込む。内装は年季が入つており、木製の床は踏むたびにキイと音を立てる。だが店内の雰囲気とは異なり、ずらりと並ぶ武器はどれも新品で輝いていた。

奥から出てきた六十代くらいの店主に声をかけ、俺は欲しい剣の要望を伝える。店主は少し待つてくれと席を外し、しばらくして戻つてくると目の前の机にずらりと武器を並べた。武器の性能を丁寧に紹介してくれるが、いまいちピンと来ない。

「うーん、お兄さん。これ以上軽いとなると、レイピアのほうがいいんじやないかのう」

店主は長い顎ひげを触りながら俺のほうを見る。

「ニル的に、レイピアはどうなんだ?」

「別に悪くはないけど使い慣れていないし。やっぱり普通の片手剣のほうがいいかな」

確かに、レイピアであれば持ち前の素早さを生かせそろではあるが、慣れていない武器の技を今から会得するのは難しい。それに、今欲しいのは来る日に扱える即戦力の武器だ。俺的には片手剣が好みまい。

店主は難しそうな顔をしながら、レイピア以外の武器も見させてくれた。

「真剣に選んでいるんだな。意外だ」

「ねえ、セシル。俺をなんだと思ってるの？ そりや、武器を新調するんだし、慎重にもなるよ」「新調するから慎重に……ダジャレか？ おもしろいな」

「待つて今のなし」

無意識だつたが、気づいたセシルはブツと噴き出した。羞恥心を抑えながら、武器に視線を戻す。やはり、レイピアはダメだ。心が惹かれないし、違う気がする。

レイピアを元の場所に戻してから、もう一度店の中を物色する。その間に店主は机の下からある剣を出して、俺に見せてきた。それは、小ぶりなナイフだつた。

「これは？」

「ダガーだよ。このダガーはちよいとおまけ付きでな？ 若いもんが身を守るにはピッタリじゃよ。軽くて安い。どうじや？」

「あ、あはは、ありがとうございます。けど、護衛がダガー一本つて」

いいダガーだが、今回はメインとして使える武器が欲しかつた。護衛が短剣一本しか持つていな

いなんて、他の騎士から舐めていると思われる。そもそも、ダガーで戦える技量は俺にはない。注文の多い客だなあ、と店主は俺を睨む。しかし、客の要望には応えたいらしく、どんな武器が欲しいのか詳しく教えてくれ、と言つて紙を渡してきた。どうやらオーダーメイドで作つてくれる

ようだ。

「まあ、オーダーメイドだと三週間以上かかるがのう」

「さ、三週間以上ですか」

俺がそう聞き返すと、「今、うちにはいい金属も鉱石もない」ときつぱり言われてしまつた。

職人のオーダーメイドとなればすぐにできることはわかるが、三週間後では襲撃に間に合わない。俺は肩を落とした。

もう少し早くできないかと聞いてみたが、なら他の店をあたつてくれと言われてしまつたので、しぶしぶ了承した。

（じやあ、今の剣でどうにかするしかないか。まあ、生き残つてからも使える剣があつたほうがいいから頼むけどさ）

オーダーメイドなら、きっと俺の理想の剣になるだろう。生き残つた暁に、新たな相棒を迎えるのもいいかもしれない。それに、今の剣も何度か使えば手に馴染むだろう。

セシルは、自分の剣と店内に置いてある剣を見比べ、吟味していた。

結局、セシルもオーダーメイドの剣を頼むことにしたようだ。しかも、俺が頼んだものよりも重量のある剣を注文していた。さらに、俺よりもはるかに時間がかかるらしい。代金は後払いと言われたので、俺たちは注文が終わると店を出ることにした。ちなみにおすす

されたダガーはちやつかり買つてしまつた。

ダガーを懷に忍ばせ、そろそろ宮殿に戻ろうという話に落ち着いた。

まだ日は暮れていないし、今から戻つてもセシルの夕食の時間には十分間に合う。勝手に抜け出

してきたことがバレたら大変なので、来たときと同じく、見つからないように宮殿に戻らなければならぬ。

俺たちは足早に歩いた。

「今日は久しぶりにニルと遊べて楽しかった。また、こういう機会を作ろう」

「そうだね。本当に久しぶりだつたなあ。学園がはじまつたら遊べなくなりそうだからね。学生は勉強が本分だし」

俺は最初に感じていた不安をすっかり忘れていた。

俺たちは二年後にはモントフォーゼン学園を卒業する。その後、セシルは即位式を行う予定だつた。第一皇子のセシルは学業とは別に、幼いころから帝王学を学んでいる。それもすでに大詰めに入つているが、学業との両立はやはり大変そうだつた。幼いころからセシルの姿を見てきたから、彼の苦労を誰よりも理解しているつもりだ。セシルは一度も弱音を吐かず、求められたことを完ぺきにこなしていた。

そんなセシルは俺の隣で、「ずっとニルと遊んでいたい」と皇太子らしくないことを言つて頭をかいている。銀色の髪が太陽に照らされてキラキラと輝く。俺よりもたくましい背中を目で追いながら、彼の隣にいつまでいられるのだろうと考える。

（結局普通に遊んじゃつたし……俺、ダメだな）

セシルといふといつも楽しくて他のことを忘れてしまう。それは、嫌なことから逃げているようにも思える。

このまま平和であればどれほどいいか。でも俺は、きっと訪れるだろう悲劇に備えなければならぬ。

気持ちを持ち直し、すでに目と鼻の先にある宮殿に続く坂を上がつていこうとしたときだつた。道の脇にうつそつと生い茂る木々の隙間から、何かがキラリと光つた。俺は瞬時に危険を察知し、セシルに手を伸ばすと、そのまま彼を押し倒す。

俺たちが倒れた音とともに、足元にナイフが刺さつた。

「ニル……！」

「大丈夫。怪我していないから。刺客……か。出てこい！」

先ほどまで感じなかつた殺気を肌で感じ取る。俺はセシルの上から降り、腰に提げていた剣を引き抜いて周囲を警戒した。

セシルは俺の背中側に立つと、剣を抜いた。敵は一向に姿を現さず、緊張の糸が張り詰める。いつ、どこから襲いかかつてくるかわからないし、何人いるかもわからない。

俺たちは微動だにせずに、静かに呼吸を繰り返していた。背中合わせのセシルが「五人だ」と口にし、呪文を詠唱する。すると、セシルの足元に銀色の魔法陣が浮かび、風が巻き起つた。その風によつて木々が勢いよく揺れる。すると次の瞬間、木々から一斉に黒服の男たちが落ちてきた。

「ほんとだ、五人だ」

「三人倒したほうが勝ちだな」

セシルは、まるで今からゲームをはじめるかのようにならうに笑った。

セシルを狙つての襲撃だろうに、当の本人はあまり危機感がない。命を狙われる状況に慣れてしまつたという悲しい理由もある。だがそれ以前に、これまでセシルに傷を負わせることができた刺客は存在しない。そのためセシルは、刺客による襲撃を実戦訓練のように思つているのだ。

（これが、俺が死ぬイベント？）

いや、スチルは夜だったはずだ。こんな日のある時間帯ではない。これはよくある襲撃の一つだらう。

能天気なセシルと違い、俺は剣を握る手に力がこもつていていた。俺が死ぬイベントではないにしても、死ぬ可能性は大いにあつた。死と隣り合わせの感覚は何度経験しても慣れない。

「一、二の三で動くぞ」

「それいる？」

「フライングされて、先に倒されたら困るからな。勝負はいつも公平であるべきだ」

「こんなのを勝負にしないでよ」

「……二の……三つ！」

セシルの声とともに同時に動いた。俺は刺客の一人に斬りかかる。だが、一撃目はあと一步のところで避けられてしまつた。しかし、この一撃目は陽動で、相手のバランスを崩すためのものだ。一撃目は体勢が崩れたところを狙い、剣を深々と突き刺す。剣を引き抜くと、刺客は地面に倒れた。

俺の相手はまだ一人残つている。セシルに視線をやると、三人に囲まれていた。全員手練れには見えないので、三人相手でもセシルなら大丈夫だろう。

セシルの顔には余裕の二文字が浮かんでいた。刺客たちは息を合わせて、三人同時にセシルに襲いかかつた。三方向からの攻撃に思わず、危ない！ と叫んでしまう。

だが、セシルには心配など無用だつた。彼は冷静に剣を横に薙ぎ払う。すると、男たちの腹に大きな傷ができる、三人とも力なくその場に倒れた。

無事に刺客を全員倒すことができて一安心する。これで終わりだろうと安堵した瞬間、妙な違和感を覚えた。

セシルは、剣についた血を振り払つて鞘に戻している。隙のできたセシルの足元の影がゆらりと揺らめいた。俺はまずいと思つて全力で駆け出した。

「セシルッ！」

「ニル……ツ？！」

シャツ——と右腕に熱い何かが走つた。熱はすぐに痛みへと変わっていく。

俺は痛みに耐えながら、セシルを庇うように押し倒す。先ほどよりも大きな音を立て、俺たちは地面に倒れた。だが、先ほどとは違い、俺はすぐに起き上がりなかつた。涙で歪んだ視界の中、自分の右腕にナイフが刺さつているのが見える。

「ニル！」

「……セシル、五人じゃない。六人」

「……つ、クソ。俺のミスだ」

セシルの影から現れた刺客は、影の中に戻ろうとしていた。だが、その前にセシルが詠唱する。銀色の魔法陣が浮かび上がり、青い炎が燃え上がる。青い炎は矢となつて刺客の胸に穴を開けた。

刺客は声を漏らすことなくその場に倒れ、あたり一面は赤黒い血で染まつた。とりあえず、全員片づけることができたようだつた。他に仲間がいなかつたか確認したが、周辺に人の気配はなかつた。

セシルは倒れたままの俺を抱き上げて、大丈夫かと身体を揺らす。ナイフの刺さつた右腕からは、とめどなく血が流れていた。

「ニル、傷が……！」

「セシル、あんまり大声出されると、傷口に響くつて……大丈夫、心配しないで……でも、宮殿を抜け出したのバレちゃつたね」

苦笑いしつつ坂の上を見ると、父と複数人の騎士が駆け下りてくる。セシルはしまつたというようになつて、「ああ……」と声を漏らし、呆然と立ち尽くしていた。

俺は右腕を押さえながら、震える右の手のひらに目を向けた。

セシルが襲われると思った瞬間、咄嗟に身体が動いた。セシルのことで頭がいっぱいになり、自分の身を守ることはすつかり頭から抜けていた。セシルさえ無事でいればいい、そう思ったのだ。でも、それじゃ意味がない。

（もつと鍛錬が必要だ。このままじやセシルの未来を守れない……）

俺もセシルも、一人とも無事でなければ意味がない。俺が死んで、セシルの心の傷になることだ

けは絶対に避けなければならない。

駆けつけた父と目が合つてしまつた。父は、「無茶をしたな」とでも言わんばかりの目で俺を見ていた。まだまだ自分は弱い。俺は目を逸らし、苦笑することしかできなかつた。

◆◆◆◆

宮殿の医務室のベッドにお世話になつたのは久しぶりだ。

「兄上を守つて傷を負つたと聞きましたが、もう大丈夫なのですか」

「はい。大丈夫ですよ。心配していただき、ありがとうございます。ネーベル殿下」

ベッドサイドの椅子に腰かけ、俺を心配そうに見てゐる小さな銀色の頭に、俺はペコりと頭を下げる。

俺に話しかけてきたのは、ネーベル・プログレス第二皇子殿下——セシルの弟だ。その後ろにはセシルと主治医、ネーベル殿下の従者が数人控えている。大事になつてしまい、俺はいたたまれない気持ちになる。

あの襲撃から三日経つた。

ナイフの刺さつた右腕にはまだ包帯が巻かれているものの、十分に動かせる程度には回復した。

それもこれも、処置が早かつたためだ。

あのあと、宮廷魔導士により治癒魔法を二つかけてもらつた。一つ目は傷の広がりを防ぐ魔法。

二つ目は、傷の治りを早める魔法だ。そのため、俺の腕の傷は順調に塞がりつつある。ただ、痕は残ると診断された。

結果的に俺もセシルも無事だった。だが、無断で宮殿を抜け出したことはこつびどく怒られ、当分の間の謹慎処分が言い渡された。俺は傷が完治するまではエヴィヘット公爵邸には戻れず、宮殿の医務室に閉じ込められている。

また、しばらく身体を動かすことも禁止された。あの奇襲から三日しか経っていないが、すでに退屈で、一日でも早く剣を振りたいという気持ちが強くなる一方だった。まだ脅威を退けることができないため、不安が胸に残っていた。

診断が終わり、主治医は外に出て行く。だが、ネーベル殿下はその場を動こうとしなかった。従者に「外に行きましょう」と言われたが首を振つて聞かない。

「ニルさんの看病をするんです」

ネーベル殿下はシーツを掴んでこの場にとどまる意思を見せた。従者たちは困った様子で顔を見合させていた。

ネーベル殿下はまだ十二歳だ。小柄で手足は短く、頬はもちもちとしている。白い肌に銀色の髪、そしてセシルと同じ夜色の瞳は大きくて、まるでビスクドールのようだ。

年下に心配されているという情けなさはあったものの、ネーベル殿下の優しさが沁みる。ネーベル殿下は、俺の腕を見て痛そうに自分の右腕をさする。ネーベル殿下を心配させないよう、言葉をかけようと思つたが、その前に後ろで腕を組んでいたセシルが、彼を叱るように声をかけた。

「おい、ネーベル。ニルが落ち着かないだろう？ それに、お前は勉強があるはずだ。家庭教師が待つていると聞いたぞ？」

「兄上……」

「お前は第一皇子だろう。勉強が苦手なのはわかるが、努力しろ」

セシルはネーベル殿下の肩を叩く。ネーベル殿下の顔が一瞬曇つたが、すぐに切り替えたように、「はい」と頷いて立ち上がった。

（セシルも人のこと言えないじやん）

今回の件でセシルは、謹慎処分の他に勉強と鍛錬の量を増やされたと言つていた。彼もここに居座り続けるのはおかしい。

大人げないと思いながら、俺はネーベル殿下に微笑んだ。

「ありがとうございます、ネーベル殿下。俺のことを心配してくれて」

「いえ、当然です！ ニルさんは、僕の第二の兄のような存在ですから！」

へへ、と笑うネーベル殿下を見ているとさらに、心を撃ち抜かれる。あまりのかわいさに、抱きしめたくなってきた。

しかし、そんな俺たちのことを、セシルは一段と不機嫌そうな表情で睨みつけた。ネーベル殿下はそれに気づいたのか、「名残惜しいですが、失礼します」と言つて立ち上がる。そして、去り際にこそりと耳打ちした。

「兄上、僕たちが仲よくしているのを見て嫉妬しちゃったみたいですね」

立ち読みサンプル

はここまで

「え……？」

その後、何事もなかつたようにネーベル殿下は部屋を出て行つた。ネーベル殿下に言わされたことをいまいち理解できないでいる、「おい」と上から声が降つてきた。

見上げると、むすつとした表情のセシルが俺を見下ろしている。

「何？ セシル」

「ネーベルに何を言われた？ あいつも年頃の男だ。お前を狙つてはいるかもしない」

「狙つてはいる？ それ、どういうこと？ それとなんで怒つてるの？」

「怒つてなどいない。はあ……」

セシルは苛立つたようにため息をつき、髪をかきあげた。理由はわからないが、今は虫の居所が悪いらしい。刺激しないようにしようと、俺は余計なことは言わないことにした。

俺とセシルしかいなくなつた医務室に、微妙な空気が流れる。セシルはネーベル殿下が座つていた椅子に腰かけ、長い足を組んだ。

「鍛錬は？」

「今日はサボる」

「サボるつて。勉強も鍛錬も量を増やされたつて聞いたけど。サボつたら怒られない？」

「怒られても別に構わない。それに、お前も一人だと退屈だろう？」

「俺のことはいいんだよ。セシルが——」

「……じゃあ、俺が一緒にいたい」

セシルはそう言つて口を尖らせた。今日のセシルはなんだか駄々つ子のようだ。でも、セシルの言う通り、一人では退屈だつた。

外に出られないだけではなく、気を紛らわせるために外を見ようにも、この部屋の窓は小さすぎるので、一人だと気が滅入るから、セシルがいてくれるのは正直嬉しかつた。

「そう……じゃあ、ここにいていいよ」

気を遣う相手がいなくなつて、俺はうーんと上に腕を伸ばした。身体の節々から音が鳴る。そんなふうに俺が簡易的なストレッチをしていると、心配そうに揺れる夜色の瞳と目が合つた。

「腕は痛くないか？」

「うん？ まあ、この通り動かせるし大丈夫だよ。治癒魔法はかけてもらつたけど、魔法も万能じゃないからね。痕は残るみたい。でも、それは主君を守つた勲章つてことで」

セシルもこれで安心してくれるだろうと思つてはいるが、なぜか彼は顔を暗くした。

「悪かった……な」

セシルはそう言つと、視線を下に落とした。膝の上で手を握り、膝に爪を立てている。セシルが謝ることなんて一つもないのに、どうして自分を責めるのだろうか。

（そんな顔しないでよ……）

セシルを心配させてしまつたという事実に、胸が痛くなつた。でも、きっとセシルのほうが苦しんでいる。

もし俺が自分の死を回避できなかつたら……そのとき、セシルは止氣を保つていられるだろうか。